



平敷屋の概要

H E S H I K I Y A



勝連平敷屋は、勝連半島の東端に位置し、海拔約50m～80mの地点にあります。尚貞王代の1676(延宝4)年、勝連間切から与那城間切が分離し、平敷屋村に勝連間切の番所が置かれ、以来1910(明治43)年勝連平安名に移転するまで、間切行政の中心地として繁栄していました。「…村の高さや平敷屋村…」、「…島崎や平敷屋、安勢理、饒辺…」と昔、勝連間切の各集落の位置や地勢を詠み歌われたように、平敷屋は勝連半島の先端で東南部一帯(旧集落の小字平敷屋のほか、後原、美津久、平原、嘉真舎、美栄間、陳那、溝原、名護原の一部)の高台にある古い集落です。

トラパーチン

平敷屋で採掘されている石灰岩「トラパーチン」は、沖縄では他に宮古島でしか採れないといわれている程の貴重な産物です。もとはといえば、水に溶け込んでいる炭酸カルシウムが沈殿してできたもので、緻密・硬質という性質上、装飾用石材として加工されます。おもに、墓石やシーサー等に加工されており、国会議事堂の正面玄関の柱にも使用されているほど、高く評価されています。



INFORMATION

勝連地区の位置

沖縄本島中部の東海岸、中城湾と金武湾の間にある勝連半島の南西半分と浜比嘉島、浮原島、南浮原島、津堅島からなります。



勝連地区の歴史

先史時代の遺跡は51カ所確認されています。遺跡は半島側では南側に多く、津堅島では海岸部に点在、浜比嘉島には洞穴内遺跡が多くあります。

勝連城主10代目・阿麻和利の時代になると勝連は最盛期を迎えます。徳之島や奄美大島、さらに中国や朝鮮との交流も盛んに行われていました。しかし、中城城主・護佐丸と争いがおこり、後に中山軍に滅ぼされました。勝連間切は1908(明治41)年に市町村制の施行で勝連村となり、1980(昭和55)年に町制に移行し、勝連町となりました。

2005(平成17)年には、旧具志川市、石川市、与那城町と合併し、うるま市となりました。



沖縄県うるま市教育委員会

〒904-2292 沖縄県うるま市みどり町一丁目1番1号
TEL. (098) 923-7182

平敷屋朝敏 (へしきや ちょうびん)

平敷屋朝敏は、1700年首里金城村に生まれ、1734年に34歳の若さで安謝港において「八付」にされました。朝敏は薩摩支配下における苦難の時代に、士族という身分におこることなく、農民をはじめとした弱い立場の人たちに温かい眼差しを向けることのできた沖縄近世随一の和文学者です。彼の作品には『貧家記』、『手水の縁』があります。

うるま市 文化財シリーズ 13



平敷屋

H E S H I K I Y A



沖縄県うるま市教育委員会

哀そのはた打かへす
(この暑さの中で働いている)
せなかより
(農夫の背中から)
ながるるあせや
(滝のように汗が流れ落ちる姿が)
瀧つしらなみ
(水の音である)

※この歌は朝敏の、働く農民に対する労りの心が伺えることから平敷屋タキノ一の歌碑に選定されました。



平敷屋タキノ一 (市指定文化財/史跡)

勝連平敷屋の南端に所在する標高70m余りの小さな丘陵です。1727年脇地頭としてこの地に配された平敷屋朝敏は、水不足に悩む農民のために溜池を掘削し、この時に掘り出した土を盛り上げて築いたのが「平敷屋タキノ一」です。近年住宅化が進み、池も大部分が改修・縮小されました。平敷屋タキノ一も公園化事業の中で整備され、いくらか昔と趣を異にしましたが、勝連半島を取り巻く太平洋を眺望できる景勝地にあり、朝敏の和歌の記念碑もあります。

また、御嶽やヒータティムイも隣接することから、村落史研究の上からも重要な史跡です。

平敷屋 の文化財



11 平敷屋製糖工場跡(国登録記念物)
平敷屋製糖工場は、1940(昭和15)年、平敷屋地域の11組の旧サターヤー組が合併して建造された、蒸気を動力とする共同製糖工場でした。『平敷屋字誌』などによれば、工場建物は南向きで、その前面に3基の煙突が立ち、煙突の1つは蒸気機関(45馬力)のボイラーにつながり、燃料には石炭を使用したとされます。
1944(昭和19)年10月以降、工場は操業できず、その後は米軍の攻撃により破壊されましたが、工場跡には今でも煙突1基と貯水槽が現存しています。近代の沖縄の製糖業の歴史と技術の展開を知るうえで、貴重な遺跡であり、2015(平成27)年1月に国登録記念物に登録されました。

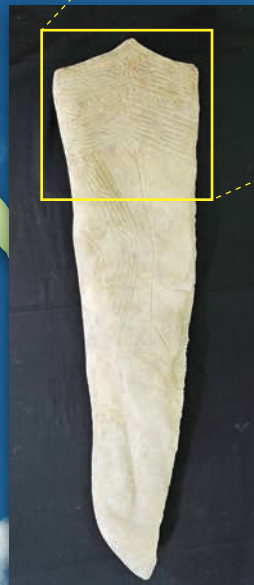


イメージ図



Heshikiya

4 平敷屋トウバル遺跡



勝連半島先端の南側に位置する在沖米軍施設ホワイトビーチ内にあり、中城湾に面した低砂丘地に立地しています。これまでの調査で、集落跡を思わせる柱穴群や九州との交易品と考えられる大型巻貝の集積遺構などを検出しました。また土器、石器、貝製品などが多数出土したことで、縄文時代後期(沖縄貝塚時代前期。約3500年~3000年前頃)~グスク時代の複合遺跡であることが判明しました。
2006(平成18)年の発掘調査では、縄文時代後期に相当する竪穴式住居跡や土抗群が良好な状態で検出され、遺物では縄文時代中期(沖縄貝塚時代中期。約4000年前頃)にみられる条痕文系土器が出土し、遺跡の時期がさらに遡ることが明らかになりました。また近年の調査では、表面に縄文時代後期頃の土器を模した文様が刻まれた線刻石板が発見されています。
本遺跡は長期にわたり生活の場として利用されていた複合遺跡で、さらなる遺構、遺物が発見される可能性があります。

**平敷屋エイサー
(市指定無形民俗文化財)**

平敷屋エイサーは、旧暦7月15・16日に祖霊を供養する盆踊りです。起源は定かではありませんが、1903(明治36)年頃までは、平敷屋独自のごく素朴なものであったといわれています。
現在の念仏形式の加わった盆踊りは、1904(明治37)年県内で評判だった名護市世富慶エイサーを当時の青年会長が名護市に出向いて習い、会員に教えたのが始まりで、それを基に独自の型を確立しました。ジューター(地謡)、ハントゥー(酒がめ)持ち、太鼓打ち、踊り手、中わち(世話役)で構成され、白と黒で統一された衣装(紺地)を身にまとい、太鼓打ちは、裸足で踊るなどエイサーの古式をとどめた独特なものです。



1 西の御嶽

西の御嶽は、勝連平敷屋の南西約500mの離れた山中にあります。この神は女神で、男性は昔から立ち入り禁止となっています。集落の安全・繁栄を願う拝所で、現在は軍用地内になっています。



3 平敷屋古島遺跡

この遺跡は、グスク時代~近世にかけて形成された集落跡です。くびれ平底土器やグスク土器、中国陶磁器、タイ産土器、鏝、鉄鏝(鉄製のヤジリ)などが出土しています。特に注目されたのは、鏝や鉄鏝が発見されたことです。
グスク時代にグスク以外の集落にも鏝や鉄鏝などの武器が存在していることが確認されたことで、石垣に囲まれたグスクと集落とが密接に関わっていることが明らかになりました。

民俗文化財・その他文化財

- 1 西の御嶽
- 2 ヒージャーガマ
- 3 前の御嶽
- 4 平敷屋朝敏屋敷跡
- 5 シリー御嶽
- 6 ヒッチャマー
- 7 勝連間切番所跡
- 8 カンジャーヤー跡
- 9 とうの御嶽
- 10 平敷屋タキノ
- 11 平敷屋製糖工場跡
- 12 ヒータティムイ(火立森)
- 13 東の御嶽
- 14 按司墓

遺跡

- 1 平敷屋遠見番員塚
- 2 平敷屋原遺跡
- 3 平敷屋古島遺跡
- 4 平敷屋トウバル遺跡
- 5 平敷屋遺物包含地

井泉

- 1 チブヌカー
- 2 リードゥガー
- 3 ノロガー
- 4 上ヌカー
- 5 下ヌカー
- 6 アガリガー
- 7 イリカー
- 8 ヒラカー
- 9 浜川
- 10 ジンナカー

● 印は民俗文化財・その他の文化財
● 印は遺跡
● 印は井泉

12 ヒータティムイ(火立森)

ヒータティムイは、勝連平敷屋土地改良区の西側、標高約66mの小山です。昔の情報伝達手段である、狼煙を上げた場所といわれていますが、よくわかっていません。



6 ヒッチャマー

ヒッチャマーは、平敷屋村の氏神で、昔の村屋跡にあります。ほとんどの村行事をはじめ、平敷屋エイサーやウスデークもここで奉納してから始まられています。また、戦前は毎年、旧6月14・24日にも「タコ綱」挽きもここで行われていました。



3 ノロガー

ノロガーは、火立森の南西側、粘土質の崖中腹、大きなアカギの根元にある小さな井泉です。集落の発展を祈願する拝所です。周辺はアカギの群落が広がっています。

